

母親の子どもに対する分離不安：探索的研究

伊 崎 純 子

キーワード：母子分離・分離不安・日本の母親

Keywords : mother-infant separation, maternal separation anxiety, the Japanese mother

Abstract

In comparative culture studies, the following are often identified as features characteristic of Japanese mother-infant relationships. First is the close physical infants. Second is the extremely few instances of mother-infant separation seen during infancy. Even today, when about half of all mothers with infants work outside the home, the desire to raise their children themselves at least until their children reach the age of three still prevails. In presentation, I would like to focus on maternal separation anxiety.

In our experiment, we chose 24 mother-infant groups as subjects. The mothers were 32.2 years old on average, and the infants 24 months on average. The unique feature of our experiment was that we studied the mother's behavior by allowing them to decide how long they would tolerate separation from their infants. We analyzed the relationship between their behavior and feelings of how long they could leave their children alone in a place they could safely entrust their children. In our study, we investigated the relationship between

a mother's awareness of mother-child separation and the time she was separated from her child, and saw no significant differences between the two. We found three items that were related to the time of separation. First was whether or not the mother had known the interviewer previously. Second, mothers who were able to remain separated from their children for long periods regarded their children as being outgoing and showing no stranger anxiety when placed in unknown situation. Third, there was a relationship between short separation time and a child's favorable development in motor, language, and social skills.

Lastly, I would like to introduce a special program aired on NHK, Japan's national broadcasting station. Then I reached the conclusion that it is important that we supported women's child rearing practices by making them understand the following points thoroughly. First, achievement of maternal separation at an early stage and a later stage has in each case both advantages and disadvantages. Second, achievement of maternal separation is the result of the interaction between a child's temperament and the mother's interpersonal anxieties. And third, a child's attitude may change once he or she begins interacting with more people.

1. 問題と目的

日本の母子関係は比較文化研究において、身体的・心理的に密着していること、「乳児期」においては母子が分離するという経験が非常に少ないことが指摘されてきた。幼児を持つ母親の半数が仕事を持つようになった今なお「3歳までは母の手で育てたい」という風潮が根強く残っている。1998年に水野が乳児期の子どもを持つ母親に対して質問紙調査を行ったところ、ベビーシッター利用に対する意識は「利用したい」「できれば利用したい」の肯定

的回答が16.1%であったのに対して「利用したくない」「できれば利用したくない」の否定的回答が81.9%という高い数字だった。さらに幼児期になっても肯定的回答は24.8%にとどまっている。筆者の所属する短期大学部幼児教育科は幼稚園教諭および保育士の養成校である。学生によれば、アルバイト先の幼稚園や保育所でも子どもを安心して預けられず、いつまでも柵越しに子どもの様子を窺う母親も少なくないという。従来、分離不安という言葉は子どもが母親から離れられない現象を説明する際に用いられたが、ここでは母親に焦点をあて、母親の分離不安について注目したい。

まず、愛着や分離にまつわる先行研究をレビューする。1969年に Bowlby が愛着に注目して以来、発達初期の愛着関係の質が後の人格形成の基盤として決定的な役割を果たすと考えられてきた。そして Ainsworth (1978) や他の研究者によって初期の愛着関係が就学前あるいは児童期の子どもの社会情緒的発達に影響を与えるという研究結果が発表され、数多く追試された。日本でも追試され、三宅ら (1990) によると母親がいてもいなくても変化に乏しい回避型 (“A”:avoidant) の子どもがアメリカでの結果よりも少なく、愛着のタイプではなく子どもの分離不安の有無が幼稚園での適応に関係していた。一方で分離に関する研究に目を転じると、Mahler ら (1981) の分離一個体化理論や臨床研究から、Masterson ら (1975) や Adler (1985) は、母子分離のプロセスをうまくやり遂げたかどうかが境界例や思春期の情緒的問題と関係すると指摘してきた。日本でも清水 (1999) によって母子分離の安定性と青年期の社会性との関連を調査した研究がある。そこでは、乳児期の分離のタイプは将来の社会性までは予測しないという結果が導き出され、その理由としてスキルとしての社会性は後の発達過程の中で身に付けていくことができるためだと考察されている。しかし、青年期の主観的な「自己信頼感」は乳幼児期における分離の安定性と関連していたことは注目に値する。

さて、乳幼児の分離不安とは「乳幼児が、その依存対象である母親またはその代理人物から、ひき離される時に示す不安である。この不安自体は病的なものではなく、むしろ良い母子関係が存在することを示唆する健康な反応」

だとされている（新版精神医学事典より）。子どもの分離不安は、人見知りにはじまり、対象恒常性の発達した生後10ヶ月ごろから母親の姿が見えないと泣いて探す行動として表現される。その後、「戻ってくる」ことも認識されるようになると分離に対して耐性ができると考えられている。これらの発達側面については多くの研究がされてきた。他方、母親側の視点から「母親の分離不安」を指摘した研究はそれほど多くない。1980年に中野は、通年の週1回の親子教室で母子分離できない子どもを「不分離児」と呼び、その子たちに過保護児あるいは放任児が多いという経験的な印象から調査を行っている。そして母親のしつけの甘さと「不分離児」とに関連があるという結果から、3歳前後で母親から離れない子の場合、子どもばかりでなく母親自身が子どもの自律や分離に不安を持っているのではないかと推測している。前述した水野（1998）は、質問紙調査から、子どもが乳児期に分離不安の高い母親は、分離不安が低い母親に比較して、伝統的母親役割割感を強く持ち、子どもを預けての外出を控える傾向にあるとの結果をえている。その後追跡調査したところ子どもが幼児期に入ると分離不安の高かった母親も分離は必要と感じるようになっていた。しかし一方で不安も依然として高く分離に対してアンビバレントな感情を抱いていたこともわかっている。これまで、杉山（1992）が指摘するように先行研究は母親の意識調査にとどまり「実際の“母親自身の”分離にまつわる行動に関しては今後の検討課題」として残されてきた。そこで本研究では、母親の分離行動に着目し、まず「母親の分離不安」は中野（1980）にならい、「子どものそばから離れない」「他者に子どもを預けられない」現象として現われると仮定する。そして、実際に分離場面を設定した場合、母親の分離不安の高さは母親自身の行動として、分離できる時間の短さに反映されるかを検討することを目的とした。

2. 方法

実験場面の設定だが、Settlage ら（1991）および Okimoto ら（2001）の研究を参考に実験的な母子分離場面を実施した。自由遊び場面、母親の注意を子どもから逸らすことを目的とした電話場面、面接場面、母親の退室場面を用いた。Okimoto の研究における退室場面はストレンジシチュエーション法に準じているが、今回の実験場面は、特徴ともいえるが、退室場面をできるだけ母親にとって違和感のないものに近づけ母親の意志によって分離の時間が決められるように変更している。具体的には、「場や人に慣れる様子を撮影したい」と VTR 撮影について説明し、自由遊びや電話場面、インタビューと、徐々に母親の注意を子どもから逸らす場面を取り入れる。そのあとで「お母さんがいないときの〇〇ちゃんの様子がみたいので、お母さんに〇〇ちゃんが好きなお菓子をとりについてほしい」と説明して母親の退室を促した。母親が無理だと言語化した場合にのみ退室場面は省略することにしていたが、拒否する母親はいなかった。お菓子は VTR 撮影の映像の映る部屋に準備しており、そこでカメラを操作しているスタッフが「お子さんの様子がどんなふうに映っているかみていきませんか」と声をかけた。ここでも早く戻りたい母親には無理には足止めしないことにした。

次に被験者の概要である（表 1 参照）。母子 24 組で 1998 年 1～12 月までに K 大学内の研究室で前述の実験に協力してもらった。⁽¹⁾ 子どもの平均月齢は 24.0 ヶ月、母親の平均年齢は 32.2 歳（ $SD = 2.2$, *range*; 28–35, 未回答の 2 名を除く）で、殆どが専業主婦（18 名）で、パート勤務が 2 名、常勤の勤務が 4 名である。専業主婦は昼間の養育を自分が主に行い、パート勤務の場合は、昼間の養育を実家や知人に手伝ってもらっており、常勤の場合、一人は自営業のため、自分で養育し、他 3 名は保育所を主に利用していた。

(1) 被験者は、別のプロジェクトのため、保健所で赤ちゃん健診時に直接応募したり、ミニコミ紙にて公募した際に応募してきた母子で子どもが 6 か月、1 歳時に家庭訪問を行っている。今回 2 歳前後に成長した時点で新たに再度協力を求め、それに快諾してくれた母子が 25 組いた。1 組は 3 つ子とその母親だったので分析からは除外した。

表 1 VTR 撮影時の子どもの月齢

	平均	標準偏差	標準誤差	例数	最小値	最大値	欠測値の数
VTR時月齢, 合計	24.0	1.5	.3	24	22.0	28.0	0
VTR時月齢, 男	23.7	1.1	.3	12	22.0	26.0	0
VTR時月齢, 女	24.4	1.8	.5	12	22.0	28.0	0

資料の分析に当たって、まず「分離時間」をVTRに基づいて母親の退室から再入室までの秒数をカウントした。分離時間に関わる要因として考えられた調査項目だが、大きく三種類に分類した。1つ目は分離不安に関するもので「安心して預けられる時間」「預けられるところの有無」「面接者との面識の有無」を尋ねた。2つ目は、子どもの発達状況で遠城寺式発達検査の「移動運動／手の運動／基本的生活／対人関係／発語／言語理解」の6つの発達指数を求めた。そして3つ目に先行研究を参考に、母親の意識調査として、子供の気質について「初めての場所を探索しているとき、活発に動き回る（走る、とびはねる、よじのぼる）」「家に初めて来た人に近寄っていく」など3項目。親の養育態度として「子どもを保育所に預けることはよくない」といった「子への密着」に関する5項目および「赤ちゃんの世話をするのは不安だ」といった「育児への不安」に関する3項目について検討した。その他として、母親あるいは他者といるときの子どもの行動について、日中子どもを誰が世話をしているか、誰と寝ているかなど「生活に関する質問」、入室時の母子の位置関係、電話場面での母親が子供に向ける注視の回数、分離の際に子どもが泣いたか、なども検討した。

3. 結果

まず、分離時間をカウントした結果を＜表2＞にまとめた。

分離時間の平均は239秒即ち3分59秒だった。そこで、母親が四分以上分離したグループと四分未満の分離だったグループとにわけて、前述の分離時間に関わる要因として考えられた各項目についてグループ間に違いがあるかを検討した。月齢や性別および出生順位によって有意差が生じるか検討したところ、性別 ($x^2=0.32$, $d=1$, $p=.57>.1$)、出生順位 ($x^2=1.40$, $d=2$, $p=.50>.1$)、VTR撮影時の月齢 ($t=1.44$, $d=20$, $p=.16>.1$) では有意な差は認められなかった。

表2 分離時間の平均

	分離(秒)
平均	239.636
標準偏差	125.383
標準誤差	26.732
例数	22
最小値	32.000
最大値	522.000
欠測値の数	2

表3 結果のまとめ

分離時間と関連した項目	分離時間が短いほうが、	分離時間が長いほうが、	有意差
1. 面接者との面識の有無	実験以前に面接者と母親は面識がない	実験以前に面接者と母親は面識がある	10%水準
2. 子どもの気質	初めて会った子どもにはそっばを向いたり母親にしがみついたりしごみする	初めての場所を探索しているときに活発に動き回り、家にはじめてきた人に近寄っていく	5%水準
3. 発達指数	手の運動、発語の面で発達が平均以上に能力が高い	平均的な発達である	5%水準
	移動運動、対人関係の面でも平均以上に能力が高い	平均的な発達である	10%水準

その他、入室時の母親の位置、電話場面での子どもへの注視度、分離場面での子どもの泣き、安心して預けられる場所の有無や時間の長さ、基本的な生活習慣や言語理解の発達指数、親の教育態度、日常の生活の様子において実験場面の分離時間による統計上の有意差はみられなかった。

母親が実際に行動した分離時間の長さに関連した項目を＜表3＞にまとめた。分離時間が短いグループと関連があったのは、「面接者と以前に面識がない」場合 ($x^2=3.12$, $d=1$, $p=.07<.1$) で、「初めてあった子どもにはそっ

ぽを向いたり母親にしがみついてしりごみする」($t = -2.06$, $d = 20$, $p = 0.52 < .1$)という人見知り傾向であり、「発語」($t = -2.14$, $d = 20$, $p = .045 < .05$)「手の運動」($t = 2.55$, $d = 20$, $p = .019 < .05$)「移動運動」($t = 1.92$, $d = 20$, $p = .069 < .1$)「対人関係」($t = 1.88$, $d = 20$, $p = .074 < .1$)の平均以上の発達の良さだった。予想に反して「安心して預けられる場所の有無」($x^2 = 1.26$, $d = 1$, $p = .26 > .1$)「預けられる時間」($x^2 = 1.32$, $d = 1$, $p = .25 > .1$)という項目は分離時間と関連がみられなかった。

具体的に男女一人ずつ分離時間が最短だったケースの分離場面および最長の分離時間だったケースの分離場面について、その特徴を記述する。1番目に男児の短い分離の場合は、部屋に戻ってきた母親に「お菓子をとりに行ったときの感想」を尋ねたところ、「子どもの様子が気になりました。楽しく遊んでいるかな一と思って。こういうときは全然泣かないってわかっているんです。寝るときはママなんですけど、みんなかわいがってくれるとわかっていて、人を怖がらないんです」と答えている。それを聞いた筆者は、子どもが分離することに対して不安を抱いていないことをあえて強調したように感じた。2番目に男児の長い分離の場合は、「大丈夫かな一ってちょっと不安だった。父親と二人にすると泣くので。今日は遊べて調子よかったけれど、眠いとき、寝起き、不安なときは泣いて母親である自分を探すんです」と分離に対する不安に言及した。3番目に女児の短い分離の場合は、「泣くだろうなと思っていた。実験だから仕方ないけど後ろ髪引かれた。一瞬だけ」と分離に対する抵抗感を意識していた。また「知っている人とだったら泣かない」と面識の有無が子どもの泣きに影響していることを指摘し、全体に子どもは泣かないほうがよいと考えているようだった。4番目に女児の長い分離の場合は、「泣くとは思った。意外と早く泣きやんで安心した。普段と変わらない様子で遊んでいる」と述べ、筆者もこのケースは母子ともリラックスしているように感じた。その他のケースでは「泣かない方が心配」と言った母親や「ほら、全然、ママがいなくても平気」と寂しさとつまらなさをこめて言った母親がいた。筆者はその感想を聞きながら、彼女らは子どもが泣い

て自分を求めてくれることを明らかに期待していると感じた。また、「迷惑をかけたらどうしようと思った」と実験者に迷惑をかけることや子どものかんしゃくや泣きを回避したい気持ちを意識した母親もいた。

4. 考察

ここでは、①以上の実験の結果から考えられることと今後の課題、②日本における母子分離、③母親支援に向けての3点について考察したい。

まず、実験の結果から考えられることを述べる。今回の分析では、予想に反して母親の分離不安意識と分離できる時間に相関はみられなかった。不安を意識しても実際には分離できる母親もいるという結果である。母親の分離不安が子どもの依存に関連するのか、母親の分離にまつわる行動が依存に関連するのか、あるいはこの意識と行動とのズレが子どもに影響を与えるのかは今後の検討課題といえる。次に、分離時間に関連した項目だが、1つ目に母親が面接者と面識があったかどうかに関連し、面接者が初対面だと母親はすぐに戻って来る傾向にあった。知らない人には任せられない「預けられない不安」が母親の行動に影響したのだと思われる。菅原ら（1997）は幼児の対人不安に関する研究において、母親が相手との関係をどう感じているかが母子分離に関わっており、母親の相手に対する「対人不安」が母親の分離行動に影響を与えるという知見を述べているが、今回の結果はこの知見を支持する結果だと言える。2つ目に分離時間の長い母親は新奇場面における子どもの気質を「活発で、人見知りがない」と捉えていた。子どもの適応力を信じて母親も分離できたのだと考えられる。気質の研究を概観した三宅（1990）によれば、乳幼児期に見られたほとんどの気質は思春期・青年期まではその傾向を保つことがなく環境との相互作用によって変化を遂げるが、この「新奇な場面で人見知りをする」という傾向は、控えめな態度に終始する「自己抑制傾向」として比較的持続すると述べている。今回の結果も加味して考えると、元々の子どもの人見知りする気質が母親の分離を妨げ、その結果依存しやすい環境ができ、周囲の援助を引き出すような子どもの依存傾

向を強めたと考えられる。そして3つ目に分離時間が短いことと子どもの発達の良さが関連していた。人見知りする子どもの様子が気になるという「現実的な分離不安」により母親は子どもに関わる頻度や時間を増やし、その結果子どもの依存傾向のみならず発達も促進する結果となったのだと考えられる。他児に比べて我が子の良好な発達が母親の喜びとなり、一層母子密着を促進するという循環がこの時期に生じたのではないだろうか。しかし、この時期の発達の良さは今後、自立を促進する基礎になると考えられる。また、幼児期にみられた発達面の差は、経済社会的に低い階層ではその後も差を広げ、中流の階層であれば有意差は次第になくなるともいう。今回の被験者はいずれも地方都市の中流階層の家庭であり、発達面については今後の追跡調査が必要だと思われる。

また、今回 Okimoto ら (2001) の結果と異なり、子どもが泣いたために分離できなかった母子はいなかった。さらに分離時間も分離中の子どもの泣きと関連がみられなかった。Okimoto らは、日本人母子に分離できない母子が多かったのは、海外で過ごすこと自体が不安を高めるのではないかと、即ち日本で同様の実験を行うと母子分離できるかもしれないと推測しているが、今回の結果はこの推測を支持するものといえる。しかし、分離中の泣きにも動じないというのは、泣いたりぐずったりするとすぐに対応するという従来の日本の母親像とは異なる結果でもある。これは実験状況で実験者にどう思われるかを母親が意識し、あえて子どもの泣きを無視したのではないかと考えられる。自然観察法であればまた違う結果となったかもしれない。

日本における母子分離を考えていくに当たって、NHKが作成、放映した特集番組「世界の赤ちゃんびっくりスーパーパワー」の一部を紹介したい。1歳2ヶ月の子どもを持つある日本人家族がノルウェーの家庭を訪問する。訪問先のノルウェー人夫妻の子どもの月齢は10ヶ月である。まず、おんぶしながら寝かしつけようとする日本人の母親にノルウェー人の母親は「何故、ベッドにねせないの?」と尋ね「いつも一緒だと母親に依存する子になる」という感想を述べる。また、日本人の母親は生まれた直後から一人で寝かせ

るというノルウェーのやり方に挑戦するが、「ママと呼ばれたら、行くしかないでしょう？」とすぐに子どもを迎えに行ってしまう。ノルウェーでは10ヶ月の子どもが一人で寝ているのが普通なのである。先行研究における「不分離児」の調査研究は年齢が3歳過ぎても幼児教室で母子分離ができないのは親の態度が問題だと感じたことに端を発している。今回は2歳前後が分析対象だったが、分離時間を母親が決めることができたうえ分離の時間は平均約4分とかなり短いので幼児教室の母子分離を対象にした中野ら（1980）の研究とそのまま比較はできない。しかし、Okimotoら（2001）の研究では白系アメリカ人の子どもは多くが2歳前後で既に分離は可能であり、NHKの特集番組が示唆するように、何歳ぐらいで分離が可能なのかは文化の影響を強く受けていると思われる。つまり、日本で2歳前後の分離が難しいのは発達年齢に起因するというよりもむしろ、取えて3歳までは母子分離を奨励しない日本文化に起因するのではないかと考えられる。

日本では、特集番組のなかで日本人の母親が言うように「愛情表現」として母親のおんぶや抱っこが積極的に奨励されている。このことは乳児期にベビーシッターをうちにいれないことにもつながるように思える。今も大家族制の名残なのか預ける場合も多くは祖父母あるいは親戚を頼っている。ベビーシッターはホームヘルパーと違い福祉からの補助もないという経済的な問題もあるが、女性が育児中心の役割を担うという伝統的な母親役割への気兼ねから利用に対して否定的だとも言われている。すなわち、母親が育てないと子どもに対して悪いと感じる罪悪感と、良い母親は子どもを人に預けたりしないという気持ちを母親は意識しやすいのである。社会的な要請から働く母親は増えており、長時間保育所で過ごす子どもも実在する。理想と現実との間で母親は母子分離に対して責任を感じやすい環境にあるといえるだろう。今後、働く母親は増え、早期の分離を迫られる母子が増えることが予想される。従って、今回の結果より、以下の点に留意して母親を支援することが大切だと思われる。すなわち、分離には母子ともに「好奇心」や「慣れ」が必要で、分離の達成は子どもの気質と母親自身の対人不安との相互作用の結果

として現れるものであること、早い分離の達成は自己への信頼感を高め、一方で遅い分離の達成は他者への信頼感を高めるなどそれぞれにプラスの面があること、今後より多くの人と関係をもつことで子どもの態度は変わること、を周知させることである。さらに母乳か人工乳、布おむつか紙おむつという選択と同様に育児を他者に委ねるかどうかということも母親、できれば両親の「選択する意志」が関与しその上でプラスの面もマイナスの面も引き受ける強さを母親のみならず子育てに関わる全ての人がもつことができれば、日本において母親の分離不安を幾分軽減するのではないかと思う。

5. 引用・参考文献

- Adler, G (1985) *Borderline Psychopathology and Its Treatment.*, Aronson, Northvale
- Ainsworth, M.D.S. et al (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation.*, Hillsdale, NJ. Erlbaum.
- Bowlby, J (1988) *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development.*, New York, Basic.
- Cassidy, J. (1988) Child-mother attachment and the self in six-year-olds., *Child Development*, 59, pp.121-134
- 藤山直樹 (1998) 思春期境界例, 松下正明編『臨床精神医学講座第11巻 児童青年期精神障害』(中山書店), pp.259-270
- Hock, E., McBride, S., & Gnezda, M.T. (1989) Maternal separation anxiety: Mother-infant separation from the maternal perspective., *Child Development.*, 63, pp.793-802
- Hock, E., & Schirtzinger, M.B. (1992) Maternal separation anxiety: Its developmental course and relation to maternal mental health., *Child Development*, 63, pp.93-102
- マーラー他著 高橋雅士他訳 (1981)『乳幼児の心理的誕生－母子共生と個

体化一』（黎明書房）

町沢静夫・原節子（1992）境界型人格障害に見られる見捨てられ感の分析，
精神療法，18(6)，pp.47-55

Masterson, J.&Rinsley, D. (1975) The borderline syndrome: The role
of the mother in the genesis and psychic structure of the
borderline personality. *International Journal of Psychoanalysis*, 56,
pp.163-177

水野里恵（1998）乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究，発達心理学研究
9(1)，pp.56-65

三宅和夫（1990）『子どもの個性：生後2年間を中心に』（東京大学出版会）

森田明美（1994）働く母親をめぐる労働環境の変化と変わらない子育て責任，
発達，57(15)，pp.59-67

中野茂（1991）乳児期から就学前時にかけての社会・情緒的行動の連続性，
三宅和夫編『母子関係と乳幼児の性格形成』（東京大学出版会），pp.167-
188

中野由美子（1980）教室における母子分離観察結果，家庭教育研究所紀要，
1，pp.92-102

Okimoto, J et al (2001) The Appeal Cycle in Three Cultures: an
Exploratory Comparison of Child Development, *The Journal of the
American Psychoanalytic Association*, 49(1)，pp.187-215

Settlage, C., Bemserderfer, S., Rosenthal, J., Afeterman, J., &
Spielman, P. (1991) The Appeal Cycle in Early Mother-Child
Interaction: Nature and Implication of a Finding from
Developmental Research, *Journal of American Psychoanalysis
Association*, 39, pp.987-1015

清水弘司（1999）幼児期の母子分離型と青年期の自己像：連続性と転機の検
討，発達心理学研究10(1)，pp.1-10

伊崎純子

菅原ますみ・菅原健介（1997）幼児の対人不安傾向－その実態把握と形成過程に関する縦断的検討－，家庭教育研究所紀要，19，pp.63-73

杉山道子（1992）3歳児の新奇な場面での行動と母子分離との関連，家庭教育研究所紀要，14，pp.135-141

付記

この研究は、博士課程の特選題目（未公刊）の一部を用いて第3回マーガレット・マラー国際シンポジウム（東京）、そして光南大学病院の90周年記念国際シンポジウム：International Symposium on Culture and Psychoanalysis in Celebration of 90th Anniversary of the Chonnam University Hospital（韓国）において行った口頭発表原稿をもとに修正、加筆したものです。多くの方に研究・発表に協力していただき、ビデオを見ていただき、また討論に加わっていただいたことにより、形にすることができました。ここに記して感謝いたします。